

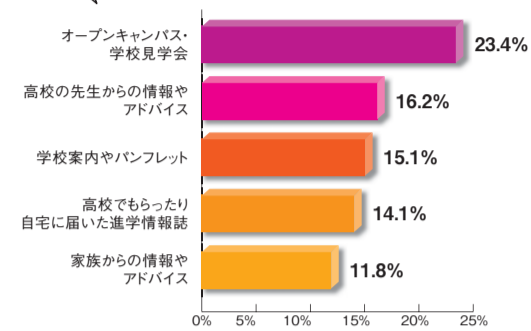
クラス担任のための Career Guidance

2010 >> VOL.1

[キャリアガイダンス 特別編集]

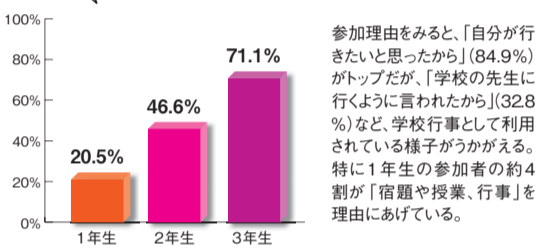
RECRUIT

第一志望の学校を受験校に決めた時期、影響を受けたメディアは？



上記は22項目中の上位5項目を並べたもの。ほかに最終的に入学した学校に関心を持った時期に影響を受けたメディアとしても21.6%でトップ。「本当にこの学校でいいのか」を確認するために、学校見学会は納得度の高いメディアだと見える。

オープンキャンパスへの学年別参加状況



※いずれもリクルート「高校生の進路選択に関する調査2009」より

学校見学会を経て 生徒に生まれる進路意識とは

- 漠然と志望していた学校を見学し、設備や雰囲気を確認でき、本当に入りたいという決意が固まった。(秋田県)
- (研究室を見学して)高校のように授業を受けるだけでなく、好きなテーマを研究できるので、勉強が楽しそうだった。(香川県)
- 将来のことは漠然としていたが、見学後は具体的に考えるようになった。(岡山県)
- (専門学校を見学して)同じ夢をもった人がたくさんいて、良い刺激になった。(北海道)
- 体験授業を受けて、どうかが学べるかわかった。まだ、将来が決まっていなかったので、ほかの学校も見てみたいと思った。(東京都)
- 誇りをもって勉強する先輩の姿が格好良かった。(秋田県)
- 何校か見学し、自分には大規模な学校より、先生が親身に指導してくれる小規模な学校が向いているとわかった。(東京都)



神田外語大学のオープンキャンパス

多くの高校で進路先研究のために活用されている「学校見学」。ただ行くだけでは効果が薄いと見え、事前・事後指導に時間をかける学校が増えているようだ。例えば広島県の県立高校では、事前に見学に行く意味を理解したうえで、ワークシートを使って気になる学校について調べ、「どこを確かめたいか」「何を質問したいか」を考える。これだけで、何も準備しないより、ずっと注意深く見て、聞いて、体験できるという。見学後は、見てきた内容をまとめ、事前に準備した疑問・質問が解決できたかを振り返るレポートを提出する。

さらにレポートを公開して生徒同士で体験を共有し、新たな発見につながりやすい学校も。グループで見学し、終了後体験内容の発表会を行い、プレゼンテーション力、表現力などを高めることを意識した取り組みもみられる。

事前・事後を厚くすると 次の行動につながりやすい

「進路の幅を広げる 学校見学会指導」

学校見学会を「次につながる経験」にするために、今回紹介する様々な事例をもとに、一歩踏み込んだ指導の参考にしてみては？

事前・事後学習と組み合わせることで、生徒は見学で何をすればいいか、ポイントをつかむことができる。これにより、その後の自発的な進路先研究を促す効果があるのではないだろうか。

志望校以外にも、いくつかの学校の見学をすすめる高校は多い。1校目は雰囲気になじむだけでも、2校目は前の学校と比べられ、自分に合う学校を選ぶ視点が出てくる。これにより「実態を知らずに名前やイメージだけで決めていた」「第一志望校以外をまったく見ていない」といった状況が打開できる。また、「志望分野が決まらぬ」という場合にも、いろいろな学校を見学するうちに、自分のやりたいことをみつけたり、本当に今の志望校でいいかと納得することがある。

事前・事後学習と組み合わせることで、生徒は見学で何をすればいいか、ポイントをつかむことができる。これにより、その後の自発的な進路先研究を促す効果があるのではないだろうか。

オープンキャンパスなどのイベントでは、開催校が見せたい「いい部分」しか見えないと心配をする先生もいるだろう。楽しい体験で、そこ以外を考えられなくなり、かえって視野が狭まる弊害も指摘されている。このため、平日の通常の授業を見学するよう指導する高校もある。ある東京の私立高校では、先生が受け入れ先となる大学を10校以上開拓。学生にまじって2日間授業に参加し、その内容をレポートで提出する取り組みを行っている。この体験により、以前より自分の適性をしっかり考え、目的をもって進路を決める生徒が増えたという。

県外の学校や教員の母校を早期に見学し意欲を高める

学校見学会参加の早期化も進んでいる(図下)。徳島県の県立高校では、1年生のときに、全員が京都大学を見学する。見学後は県外に視野を広げる生徒が増えたという。東京の私立高校では、1・2年生を対象に教員の母校を見学するツアーを実施。教員自らがガイドするため、大学を身近に感じ、やる気を出す生徒もいるそうだ。修学旅行などの行程に、学校見学会を加える高校もある。生徒に見学先を選ばせることもあれば、生徒に目指してほしい進路先や、触れてほしい先端の知の生まれる場所を、見学先として高校側が選定することもある。

通常の授業の様子を知るために平日の学校を見学

親子コミュニケーションの問題に悩む 保護者向け 高大連携教育セミナーを開催

[岐阜・県立郡上高校]

地域と密着し、保護者とも良好な関係を築いてきた郡上高校。PTAの協力のもと、進路指導部が課題と感じていた「親子コミュニケーション」について保護者と共に取り組むセミナーが実現した。テーマは「親が迷うとき、子どもが迷うとき〜心が通うメッセージ」。保護者が子どもの気持ちを汲み取り、本音で話し合えるような関係をどのように構築するか、演習も取り入れ、3日間かけて理解を深めてゆく内容だ。親子の心理分析ワークを行ったり、「毎晩9時すぎに、娘に男子からの電話が。どう声をかける?」といったテーマで話し合うなど、参加型にしたことで保護者同士の交流も生まれたそうだ。



>> POINT

- 心理学から親子関係にアプローチするセミナー開催
- 独自開催の難しいテーマを大学との連携により実現
- 参加者同士が話し合い、悩みを共有する場面もつくる

保護者への働きかけ事例 CASE1

子どもの変化や社会情勢に不安をもつ保護者に 学校、学年、担任から多彩な情報を提供

[東京・共立女子第二中学校・高等学校]

中高一貫の共立女子第二高校では、保護者に対する働きかけが非常にこまやかだ。全校保護者に向けた親子関係についての講演会や、学年ごとの学習会、通信などでの情報提供は、「学校側の意図を理解してもらい学校と家庭がチームになる」ことを目的としている。また、学年通信では意識的に進路に関する話題を多くしているが、「行動し、考えるのは生徒自身」という考えにより、生徒を飛び越して保護者に直接の情報提供は行わないように気をつけている。こうした「予防・開発的アプローチ」により、良好な関係ができると、様々な場面で保護者が教員をフォローしてくれ、生徒への指導もしやすくなるという。

>> POINT

- 問題が起こる前に保護者の不安を取り除く
- 生徒を通して情報提供することで生徒の自主性を育む
- 学年主任が担任の指導力をアピール。信頼関係作りの下地に

